虐待的養育環境は自閉症傾向を高めるか？

— 自記式尺度と表情の情動認知課題を用いた検討 —

○松尾和弥¹・福井義一²

(¹甲南大学大学院人文科学研究科・²甲南大学文学部)

キーワード：自閉症傾向, 被虐待経験, 内的作業モデル

Does abusive home environment enhance trait of autism?

Kazuya MATSUO¹, and Yoshikazu FUKUI²

(¹Graduate School of Konan University, ²Konan University)

Key Words: autistic spectrum disorder, child abuse, internal working model of attachment

目 的

発達障害の人々は対人関係上の問題を抱えることが多く、中でも自閉症者は他者の表情の読み取りが不正確という指摘がしばしばなされている (Adolphs et al., 2001; 日高, 2011; 北・細川, 2010)。ところで、発達障害が遺伝的基盤を持っていることは通説的であるが、杉山 (2007) は虐待的養育によって発達障害様の症状を呈している人々の存在を指摘している。具体的には、虐待的養育によって健全な愛着の形成が阻害され、反応性愛着障害が生じ、その中でも抑制型は自閉症圏の発達障害に類した臨床像を呈するという (杉山, 2007)。

このように自閉症障害の背景には、遺伝的要因の他に、虐待的養育と、それによって形成される不安定愛着の存在が指摘されている。小泉ら (2013) は、被虐待児が一般家庭児に比べて自閉症傾向が高いことを明らかにしているが、愛着と自閉症傾向の関連については未検討である。また、小泉ら (2013) は、臨床群を対象に検討を行ったが、青年期のアナログ群においても同様に、虐待的養育が自閉症傾向を高めるのか、それともあくまで自閉症傾向は遺伝的要因が大きいのかについても明らかにされていない。さらに、仮に青年期における自閉症傾向が虐待的養育によって高められたとして、遺伝的な自閉症者において示されるのと同様の表情の情動認知の障害 (Adolphs et al., 2001; 日高, 2011; 北ら, 2010) が再現されるかについても検討の必要があるだろう。

よって、本研究では、青年期において虐待的養育環境と愛着の内的作業モデル、自閉症傾向、表情の情動認知の関連について包括的に検討した。その際、自閉症傾向が虐待的養育や内的作業モデルよりも先行するののか、それともそれらの後に布置されるのかを検討した。

方 法

参加者：大学生・大学院生 108 名 (男性 47 名, 女性 61 名：平均年齢 23.26 歳, $SD=5.59$) が実験に参加した。

尺度構成：虐待的養育環境を測定するために、Sanders et al. (1991), Sanders et al. (1995) による CATS (Child Abuse and Trauma Scale) の邦訳版 (田辺, 1996, 2005) を使用した。多重共線性を回避するために合計得点を得たが、分布が左寄りを示したため、開平方変換を行った。愛着の内的作業モデルを測定するために、親密な対人関係体験尺度の一般他者版 (Brennan et al., 1998; 中尾, 2004) を使用し、見捨てられ不安と親密性の回避の 2 つの下位尺度得点を得た。自閉症傾向を測定するために、若林ら (2004) の自閉症スペクトラム指数 (AQ: Autism-spectrum Quotient) を使用した。多重共線性を回避するために合計得点を得た。**表情の情動認知課題：**島 (2014) の表情認知課題用刺激セットを一部変更し用いた。5 つの表情 (喜び, 恐怖, 悲しみ, 怒り, 真顔) と 4 つの情動語 (喜び, 恐怖, 悲しみ, 怒り) を組み合わせ、各表情にそれぞれの情動が表れていた程度を 5 件法で回答することが求められた。なお、分析に際し、松尾・福井 (2015) が考案した表情

の情動認知の正確さ得点を算出し用いた。また、本研究では松尾ら (2015) と同じ表情の情動認知課題のデータを使用した。

結 果

虐待的養育環境と愛着の内的作業モデルおよび自閉症傾向の関係を検討するために、構造方程式モデルで複数のモデルの適合度を比較した。その結果、虐待的養育環境が愛着の内的作業モデルと AQ を介して、表情の情動認知に影響するモデルの適合度が最も良好であることが分かった。Figure 1 に採用したモデルを図示した。虐待的養育環境が見捨てられ不安と親密性の回避を高めるとともに、どちらも AQ を高め、AQ は表情の中でも恐怖と悲しみの表情の情動認知を低下させていた。

Figure 1 構造方程式モデルの結果

考 察

本研究の結果、虐待的養育環境は愛着の内的作業モデルを悪化させることで間接的に自閉症傾向を高め、そのことが、間接的に恐怖と悲しみの表情の情動認知に障害をもたらすことが分かった。中でも自閉症傾向の抑制型と関連する親密性の回避が自閉症傾向に強い影響を及ぼしていた。親密性の回避は他者に対する回避的な行動を示すため (中尾ら, 2006)、自閉症者の特徴である“人への無関心さ (Kanner, 1943)”と類似していたと思われる。また、見捨てられ不安から自閉症傾向への影響もみられた。抑制型は同じ反応性愛着障害の脱抑制型に移行するといわれており (杉山, 2007)、見捨てられ不安は脱抑制型と関連することから、抑制型の背後には脱抑制型が潜んでいる可能性が示唆された。

なお、自閉症傾向から強い影響が現れた恐怖表情は、扁桃体が損傷すると読み取りが困難になるといわれており (菅ら, 2003)、自閉症者は扁桃体が活性化しないという報告もある (Baron-Cohen et al., 2000)。加えて、虐待経験者は健常対照群に比べて扁桃体の体積が減少していることから (杉山, 2007)、虐待経験によって自閉症傾向が高まった者は扁桃体の体積の減少、もしくは扁桃体が活性化しないことで、遺伝的な自閉症者と同様の認知的傾向を示す可能性が示唆された。